

講義

リハビリ医の妻が脳卒中になった時

三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長 長谷川 幹

御略歴

1948年生まれ。1974年、東京医科歯科大学卒業。鹿教湯病院、伊藤病院勤務を経て、1982年、日産厚生会玉川病院院長。1985年、同リハビリテーションセンター長。1998年、桜新町リハビリテーションクリニック開設。2009年より、脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会代表を務める。在宅診療を通じた地域リハビリテーションの実践を積み重ねながら、福祉のまちづくり活動から高次脳機能障害の支援まで、幅広く精力的に活動されている。

著書

『リハビリ医の妻が脳卒中になった時』（共著、日本医事新報社）

『発症部位にみた脳卒中者のリハビリテーション』（編著、日本医事新報社）

『主体性をひきだすリハビリテーション — 教科書をぬりかえた障害の人々』（日本医事新報社）

『寝たきりにさせない看護技術 — 急性期ベッドサイドから在宅までのリハビリテーション 看護&介護ボックス』（共著、医学芸術社）

『あせらずあきらめず地域リハビリテーション』岩波アクティブ新書、(岩波書店)

概要

脳出血を発症してから復職するまで、看護師である患者(妻)の視点で語られる病状、病院生活、家族や仕事への思い、退院後の生活や社会交流、脳卒中のリハビリを専門とする医師である夫の目でみた経過、他の家族への説明を振り返る。そうした自身の体験を通じて、回復における主体性の重要性と地域リハビリテーション支援の姿を考える。

